

一橋大学入試対策問題集について

「一橋入試は問題が特殊で対策が難しい…なのにきちんとした対策問題集もないし、予想問題も少ない…」そんな悩みを抱える一橋志望者は多いはず。現に私たちもそういった悩みを抱えていました。もう自分たちと同じように悩んで欲しくない、そんな気持ちから生まれたのがこの「一橋大学入試対策問題集」です。受験を突破した一橋大生ならではの解説、受験勉強を経て蓄積したノウハウ、傾向に即したオリジナル問題、本番を意識した模擬試験、合格者の成績データやおすす参考書など、一橋志望者が欲しいものは全て盛り込んだつもりです。この問題集を一橋合格のためのバイブルとして使い倒してください。「この問題集のおかげで合格しました！」そんな喜ばしい声を待っています。受験勉強頑張ってください。では、一橋大学のキャンパスでお会いしましょう。

2017年10月

一橋大学入試研究会一同

テキストの構成

一橋大学の入試問題は独特かつ難しいものとして有名ですが、その最たるものの一つは国語ではないでしょうか。類をみない長さの記述を求める現代文、明治前後の文語文、そして最後に控える要約…。あまりに特殊な傾向なので、国語を苦手とする人も少なくありません。しかし、特殊な傾向である反面、しっかりと対策をすれば確実に点を稼げる科目でもあります。このテキストでは一橋入試傾向に沿って、現代文・文語文・要約の3種類に関して3問ずつ用意してあります。さらに問題・解答以外にも採点基準を付けていますので、解き終わった後は自己採点し、ご自身の実力を把握するのに利用して下さい。解説も充実させていますので、ぜひ読みこんで合格テクニクなども学んでください。国語は正しく勉強すれば受験後も役に立つような論理的思考力を身に付けることができますので、真摯に取り組みましょう！

□
—
目次
—
□

要約(2)	要約(1)	文語文(2)	文語文(1)	現代文(2)	現代文(1)
○	○	○	○	○	○
.....
32	27	21	16	8	4

■ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今日の文明は智恵の文明にして、智恵あらざれば何事もなすべからず、智恵あれば何事をもなすべし。然るに世に智徳の二字を熟語となし、智恵といえば徳もまた、これに従うものの如く心得。今日、西洋の文明は智徳の兩者より成立つものなれば、智恵を進むるには徳義もまた進めざるべからずとて、或る学者はしきりに道徳の教をしき、もって西洋の文明に至らんとする者あり。もとより智徳の兩者は人間欠くべからざるものにて、智恵あり道徳の心あらざる者は禽獸にひとしく、これを人非人という。また徳義のみを脩めて智恵の働あらざる者は石の地蔵にひとしく、これまた人にして人あらざる者なり。

兩者のともに欠くべからざるは右の如くなりといえども、今日の文明は道徳の文明にあらず。昔日の道徳も今日の道徳も、その分量においてはさらに増減あることなく、に増減あらざるのみならず、古書に載するところをもつて果して信とせば、道徳の量はかえつて昔日に多くして、末世の今日にいたり大にその量を減じたる割合なれども、かえりみて文明の程度如何を察するときは昔日に低くして今日に高しといわざるをえず。これに反して智恵の分量は古来今に至るまで次第に増加して、智恵少なき時は文明の度低く、智恵多き時は文明の度高し。の土人に智恵少なし、ゆえに未だ文明の域に至らず。欧米人に智恵多し、ゆえにその人民は文明の民なり。

されば、今日の文明は道徳の文明にあらずして智恵の文明なること、また争うべからざるなり。また小児の概して正直にして、無智の人民に道徳堅固の者多きは、今日の実際において疑うべからざることなれば、道徳は必ず人の教によるものにあらず、あたかも人のア天賦に備わりて偶然に発起するものなりといえども、智恵は然らず。人学ばざれば智なし。(註)面壁九年能く道徳のを究むべしといえども、たとえ面壁九万年に及ぶも蒸気の発明はとても期すべからざるなり。

世に教育なるものの必要なるは、すなわちこのゆえにして、人学ばざれば智なきがゆえに、学校を建ててこれを教え、これを育するの趣向なり。されども一概に教育とのみにては、その意味はなほだ広くして解し難く、ために大なる誤解を生ずることあり。そもそも人生の事柄の繁多にして天地万物の多き、実に驚くべきことにて、その数幾千万なるべきや、これを知るべからず。ただその物名のみにも、ことごとくこれを知る者は世にあるべからず。然るをいわんや、その者の性質をや。ことごとくこれを教えんとするも、とても人力にかなわざる所なり。人間衛生の事なり、イ活計の事なり、社会の交際、一人の行状、小は食物の調理法より大は外国の交際に至るまで千差万別、無限の事物を数年間の課業をもつて教うべきに非ず、学ぶべきに非ず。たとえ、その一部分にてもこれを教えて完全ならしめんとするときは、かえつてその人の天資を傷い、活潑の氣象を退縮せしめて、結局世に一愚人を増すのみ。今日の実際においてその例少なからず。

もとより直接に事物を教えんとするもでき難きことなれども、その事にあたり物に接してせず、よく事物の理を究めてこれに処するの能力を発育することは、ずいぶんでき得べきことにて、すなわち学校は人に物を教うる所にあらず、ただその天資の発達を妨げずしてよくこれを発育するための具なり。教育の文字はなほだ穩当ならず、よろしくこれを発育と称すべきなり。かくの如く、三学校の本旨はいわゆる教育にあらずして、能力の発育にありとこのことをもつてこれが標準となし、かえりみて世間に行わるる教育の有様を察するとき、よくこの標準に適して教育の本旨に違たがわざるものあるや。

(福沢諭吉『文明教育論』より)

(注)面壁九年 一つのこと専念すること

問一 傍線ア「天賦」・傍線イ「活計」について、文中におけるふさわしい意味を答えなさい。

問二 傍線二「今日の文明は道德の文明にあらずして智慧の文明なること、また争うべからざるなり」を、なぜそのようにいえるかを明らかにしつつ訳しなさい。

問三 傍線三「学校の本旨はいわゆる教育にあらずして、能力の発育にあり」とあるが、どういうことか。文章全体を踏まえて答えなさい。(70字以内)。

解答例

問一 ア 生まれ持った資質
イ 暮らしを営む手段

問二 今日では、道徳の程度は昔よりも低いが、知恵の量は増加し、文明の程度と比例している。よって、今日の文明が道徳の文明ではなく知恵の文明であることもまた、議論の余地がないことである。

問三 学校教育の本来の目的は知識を教えることではなく、生まれ持った資質が成長するのを助けることで、物事に対処する能力を身につけることだということ。

採点ポイント (30点満点)

問一 6点……………各3点×2

問二 12点……………4点
昔に比べ道徳の程度が低い一方、知恵は高まっている……………4点
知恵の程度と文明の程度が比例している……………3点
今日の文明が道徳ではなく、知恵の文明である……………2点
議論の余地がないことである……………3点

※「争うべきことではない」など、直訳したものは1点

問三 12点……………2点
学校教育の本来の目的……………2点
知識を教えることではない……………3点
生まれ持った資質の成長を助ける……………4点
物事へ対処する力を得る……………3点

解説

問一

ア「天賦」は本来天から授かったものという意味。転じて生まれ持った才能、資質を表す。「天賦の才」など。
 イ「活計」は生活を維持すること、およびその手段。似た言葉に「生計」など。

問二

「なぜ」とあるので、理由を探すと前段落にその理由が述べてある。したがって該当部分を要約する必要がある。段落の冒頭で、「今日の文明は道徳の文明にあらず」と述べている。続く部分を読めば今日では昔に比べ道徳的なものの量が減っていることは容易に読み取れるだろう。またそれとは対比的に知恵の量がかつてより増加していると理解するのも難しいことではない。しかし、少し注意が必要なのは、なぜそれらの事実から今日の文明が知恵の文明であるといえるかである。筆者は「智識少なき時は文明の度低く、智識多き時は文明の度高し」と書いている。つまり文明の度合いは知恵の量と対応し、道徳とは無関係なものであるというのが直接の理由となる。

傍線部二自体の訳出は平易であるが、「争うべからざるなり」の訳には気をつけたい。まず「べからざるなり」が二重否定で、強い肯定を表していることを見抜くこと。そして、「争う」というのが戦いではなく、論争のことであると気づくこと。以上を踏まえ解答では「議論の余地がない」としたが、無論類する内容であれば問題ない。

問三

一橋の文語文の第三問は、要約問題が出題されることが多い。その多くは「文章全体を踏まえて答えよ」というものであるが、今回のように実質的には最終段落の要約が求められることが多々ある。いずれにせよ重要なのは、何を聞かれているのかをしっかりとらえることである。まず傍線部を見てみると、

「学校の本旨は、いわゆる教育にあらずして、能力の発育にあり」

と3つの部分に分けられる。あとはこの3つを順に説明してやればよい。「学校の本旨」はいささかわかりにくい単語であるので、適当に言い換える。「教育」と「能力の発育」であるが、最終段落をよめばこの二つが対比的に述べられていることが分かるだろう。筆者は教育を否定的にとらえ、世の中の膨大な物事をすべて教えようとするのは、「活潑敢為の氣象を退縮せしめ」と主張している。では発育とは何なのかというと、「天資の発達を妨げずしてよくこれを発育すること」と定義している。この部分が解答になり得るだろう。これだけで解答としては十分といえるが、字数が70字と多めであることから、ほかの解答となるポイントを探す。すると段落冒頭に「事物の理を究めてこれに処するの能力を発育する」と学校教育の本来目指すべきところが述べられているから、これも含めて完答となる。

全訳

今日の文明は知恵の文明であり、知恵がなければ何もすることが出来ないが、知恵があれば何でも出来る。それなのに世間では知恵と道徳の二字を熟語として、知恵と言ったならば道徳もまたそれに従う物だと考えて、今日では西洋の文明は知恵と道徳の両者から成り立つ物であり、知恵を成長させるためには道徳もまた向上させなければならぬといつて、学者の中にはしばしば道徳の教えを唱えて、それによつて西洋の文明にいたろうとする者がいる。もともと知恵と道徳の両者は人間が欠いてはいけないものであつて、知恵があつて道徳的な心を持たない者は動物と同様であり、こうした人を人非人という。また道徳だけを身につけて知恵が働かない者は石の地蔵同然であり、これもまた人ではあるが、人ではないものである。

両者がともに欠いてはならないものであるのはすでに述べたことではあるが、今日の文明は道德の文明ではない。昔の道德も今日の道德も、その量については全く増減がなく、さらに全く増減がないだけではなく、古書に書いてあることを受け入れるならば、道德はかえって昔の方が多く、道義の廃れた今日にいたってはなほだしくその量を減らしているわけではあるが、振り返って文明の程度について考察するならば昔の方が低く、今日では高いと言わざるをえない。このことは反対に、知恵の量は昔から今日にいたるまで増加してきていて、知識が少ないときには文明の度合いが低く、多いときには度合いが高い。アフリカの土着の人には知識が少なく、したがって未だ文明の域に達していない。欧米の人々は知識を多く持つていて、したがって欧米の人々は文明を持った人々である。

そうであるならば今日の文明が道德の文明ではなく知恵の文明であることは、また議論の余地のないことである。また小さい子供が大体において正直であつて、知恵のない人々が道德的にしつかりした人が多いのは、今日現実において疑いのないことであるから、道德は必ずしも人に教えられる物ではなく、さながら人が生まれ持った資質であつて、偶然に湧き起こるものであるといえるけれども、知恵はそうではない。人は学ばなければ知恵は得られない。一心に専念して十分に道德の神髄を究めるべきであるといつても、たとえそれ以上に専心したところで、蒸気を発明することはとても期待できなかったのである。

世の中で教育というものが必要なのは、すなわちこのためであつて、人は学ばなければ知恵が得られないのであるから、学校を建てて知恵を教え、育てようとするのである。しかしながら、一概に教育と言うだけでは、その意味はとても広く、かつ理解しにくいものであり、そのために大きな誤解が生まれることがある。そもそも人生における物事は煩わしいほど多く、世の中の物事はとても多いのは、本当に驚くほどであつて、その数がどれほどであるか、知ることは出来ない。ただその物事の名前だけだとしても、そのすべてを知る者はこの世にいないはずもない。ましてやその性質を知る者がいないのは言うまでもない。それらすべてを教えようとするのはとても人間の力で出来ることではない。人間の健康な過ごし方、生計の立て方、社会での人との付き合い方、一個の人の振る舞い方、小さなこととしては食、べ物の調理法から、大きなこととしては外国との外交に至るまで千差万別であり、莫大な物事をたった数年間の授業で教えるべきでも、学ぶべきでもない。たとえ、その物事の一部分だけでも教えて完全に習得させようとするときは、かえつてその人の生まれ持った資質を損ない、活発で積極的な性質を萎縮させることであつて、結局世の中に一人の愚か者を生むだけである。今日、実際にその例は少なくない。

もともと直接的に物事を教えようとするのは難しいことであるけれども、その物事に接した際に狼狽することなく、よく物事の道理を研究して対処するという能力を育てることは、(直接教えるよりは)ずっと出来るはずのことで、つまり学校は生徒に物事を教える場所ではなく、ただその生まれ持った資質が育つのを阻害しないようにして、よく成長させるための手段なのである。教育という文字は全くもつて適切ではなく、まさにこれを発育と称すべきである。このように学校の本来の目的はいわゆる教育ではなく、能力の発育であるということと標準として、振り返つて世間で為されている教育の現状を考察するときには、この基準によく適合して教育の本来の趣旨と異なつていないものがどれだけあるだろうか。